

## アイヌの物語における社会矛盾の解決

坂田 美奈子

### はじめに

本稿の目的は「アイヌの歴史」に接近するための前提作業としてアイヌの物語に含まれる対和人関係イデオロギーを抽出することである。アイヌ口承文芸と「アイヌの歴史」を架橋しようととする研究動向<sup>(1)</sup>の現時点での問題の一つは、歴史学が追及する「現実」と口承文芸が問題にする「現実」とが、そもそも次元を異にしているのに対し、この「現実」の次元に関する議論が充分になされていない点にある。この点に関して歴史学と口承文芸研究の間に合意が成立しない限り、両者の議論はすれ違えばかりであると思われる。歴史学は主に実在的な次元を対象とし、文学においてはその内容 자체が必ずしも実際の出来事である必要はない。文学における現実反映は、むしろ描写された事柄の背後にある普遍性や実現可能性という次元にある。<sup>(2)</sup>従つて口承文芸を通して「歴史」を考えようとするならば、現実のレベルの変換作業が必要となる。本稿では物語に内在するイデ

オロギーの抽出をその変換作業として位置づけたい。

本稿ではイデオロギーという用語を、特定の社会の秩序維持に必要な概念装置と定義しておく。アルチュセールによれば、イデオロギーが表象するのは人々の存在の現実的諸条件、現実世界ではなく、それに対する人々の想像的な関係である。その一方で、イデオロギーは国家の中の実践行為に埋め込まれている。それは法、制度、学校、宗教、家族、文化などのイデオロギー装置を通して保障され、実践され、生きられた知識として個人主体の中に内面化されることで現実の社会的存在に影響を及ぼす。この意味で、イデオロギーは単なる「虚偽意識」ではなく「物質的存在」である（アルチュセール一九七〇）。従つてイデオロギーは想像的認識と現実世界との媒介項と考えられるのである。

文学もまたイデオロギー装置の一部であり、文学テクストには作者の意図に関わらずテクストを生んだ時代、社会に支配的なイデオロギーが含みこまれている。口承文芸のように特定の作者が存在せず、「民間創造」（プロップ一九七六、二九頁）と

いう側面の強い媒体の場合、社会的に共有されたイデオロギーの反映度はさうに強いだろう。アイヌの口承文芸には、アイヌ社会の秩序維持のために支配的なイデオロギーが含まれているという仮説が立てられよう。

アイヌ口承文芸研究における物語分析においては、モチーフ分析という方法が主にとられてきたが、過去表象として物語をみると、この問題関心に照らすと、モチーフ分析は部分を全体の文脈から切り離してしまったために、それらを再構成する際に既存の歴史観に引きずられてしまうリスクがある。物語に含まれるイデオロギー性の抽出という関心からは、本稿においては部分よりも全体の文脈を重視したい。

## 一、銀の柳林 金の柳林

「銀の柳林 金の柳林」<sup>(3)</sup>は、孤独な少年が、同じコタンのアイヌにいじめられながら成長し、和人の国へ交易に行き、精神の悪い殿から難題を仕掛けられ、カムイの守護によって勝利し、後世豊かに暮らす、という物語である。

### 1. 物語の初期条件

主人公の僕は長者の住むような大きな家に一人で暮らす少年である。その村の頭は六人の大将兄弟 (iwan nispa uitwakne utar) で山獵沖漁の腕が良く、年に一度和人との交易に行き、帰ってきては酒宴を開いている。僕はそれが羨ましく、獵漁や交易に

連れて行ってくれるよう彼等に頼むが、いつも嘘をつかれて連れて行つてもらえない。このようにしてこの大将兄弟は悪い精神 (wen kewtum) を持つていて、明らかになる。僕には既に、この物語の主題に関わる矛盾が暗示されている。僕は長者 (nispa) の住むような家に住んでいるにもかかわらず、孤独な貧しい少年 (wenkur)<sup>(4)</sup>で、矛盾含みの存在である。さらにもう一つの矛盾は主人公と六大将との間にある wenkur と nispa という矛盾である。nispa である六大将は精神が悪く、主人公の僕は正しい精神 (pirka kewtum) の持主である。悪い精神が富み、正しい精神が貧しいという矛盾した関係がここに示唆されている。

精神における善 (pirka) と悪 (wen)、物質面における長者 (nispa) と貧者 (wenkur) という二対の概念が、この物語で問題とされている。前者は精神的価値、後者は物質的価値を表す。

### 精神的次元

この物語の主要な行為項は僕、大将兄弟、平殿、大殿であり、善を表現しているのは僕と平殿、悪を表現するのが六大将と悪殿である。アイヌにおける善悪、和人における善悪がどのように測られるのかをみてみよう。

主人公の正しさを特徴づけるのは信仰の篤さであり、その父も信仰に篤く正しい精神をもっていたウラシベツの首長である、という素姓の正しさである。一方、悪人とされる大将兄弟はカムイに礼拝せず、主人公を何度も騙し、嘘をつき、盗む企てをす

る者たち、本来クスリアイヌであるところを隠し、ウラシペツの大将として振る舞つていたという素姓の怪しい者たちである。

和人についてみてみると、悪い大殿は大将兄弟の交易相手で、

身分が高く、金持ちだが根性が悪いとされ、その所以は欲深で、偽り盗み、富を独占し、人を妬み、嘘をつき、仲間いじめをする、といったものである。精神が良いとされる平殿は主人公の交易相手で、アイヌ語で主人公に話しかけ、主人公をもてなす。彼は主人公の父を慕つてもいた。悪い殿が悪である所以は六大將が悪である所以とほぼ重なり合い、両者は交易を介して結びついている。平殿の精神の良さの理由は明示されておらず、ただアイヌの主人公との関係性において察することができるのみである。つまり平殿が善良であるのは、精神の良い主人公との結びつきにおいてであるといえる。

アイヌ社会における善惡の基準がまず存在し、和人の善惡の判断はそれに従属している。正しいアイヌは正しい和人と、悪いアイヌは悪い和人と結びつく。また、この物語においてアイヌと和人の差異は前提的に意識されているものの、それ自体は対抗軸を形成してはいない。この物語における対抗関係はあくまで善と惡の間にある。

### 物質的次元

nispaと呼ばれているのは六大将、悪い殿様、良い殿様で、wenkurは僕である。但し、和人の殿に関しては前者が大殿

(kanuy tono)、後者が平殿 (use tono) と呼ばれ、平殿は大殿との関係で、自分を「二段も三段も下位の者」であると強調しており、両者には上下関係がある。

精神的次元において悪を体现する六大将と大殿が物質的次元において「長者」であり、精神的に善である平殿は「長者」の列に加わっているものの、大殿との関係ではるかに地位が低く、大殿の横暴を何ともすることはできない非力な存在である。このように物語の初期条件として、精神的次元の価値と物質的次元の価値が矛盾をきたしているという点を指摘できる。

## 2. 物語の展開

### 物語内の歴史

物語の初期条件を把握したところで、これが物語の進展についてどのような変化を蒙るのかを検討したい。しかしその前に、

物語の初期条件を準備した段階について触れておきたい。

この物語には、主人公によつて展開されてゆく世界の前段階に関する話が挿入されている。それは神から主人公に告げられた主人公の父にまつわるエピソードである。主人公は六大将の跡をつけて和人の国へ交易に出かけるのだが、その途中、仮泊した場所の断崖絶壁に向かつて礼拝する。すると、その夜、神が夢に現れて、主人公の素性を明かし、お守り（金銀の柳の小枝）を持たせてくれる。神の話によると、主人公の父は信仰に篤く、獵漁の腕もよく、雄弁で、和人の間でも有名なウラシペツの首

長であった。しかしそのため村人に傭まれ、早々に神の国へ帰つてしまつたという。正しい精神を持つことで富を手に入れた者に対する傭みが、善と富の結びつきを崩した原因とされている。善・富の関係が崩れたことによつてもたらされたのは、悪・富の時代である。主人公の時代、富は大将兄弟や大殿が所有するところになつていたが、彼等はそれを偽り、奪う企て、独占など、不当な仕方で手に入れていた。村人はウラシペツの首長時代、彼を傭み、彼の死を早めたが、その結果として精神の悪い六大将を恐れながら暮らすことになつたのである。

主人公の時代には、精神的次元の価値と物質的次元の価値が

矛盾をきたしていたのだが、それは歴史による変化の結果であつた。<sup>(5)</sup>正しい精神を持つ主人公が、和人交易を目指し、富裕になるというこの物語は、歴史によつて生じた精神的価値と物質的価値の分裂を修復する物語であることになる。

### 矛盾の解決

精神的価値と物質的価値の矛盾を克服する力を主人公に与えたのは、彼の信仰とそれに応えるカムイの守護であった。主人公は和人の国に到着し、精神の良い平殿と出会い交易関係を結ぶ。しかしながら六大将と大殿によつて難題がつきつけられる。それは宝くらべの申し出であり、もし主人公が負けた場合、平殿ともども首を斬るとの脅しを受けるのである。旅の途中、カムイからもらったお守りがこのとき、主人公の運命を救う。主

人公は宝くらべに勝利し、大殿は償いとして「六つの金蔵、六つの米倉」を主人公へ渡し、六大将は自分たちが実はクスリ・アイヌであり、非行のため同所を追い出された者たちであることを明かし、心を入れ替えて故郷に帰る。平殿夫妻と主人公夫妻は息子の代になつても交易関係を続け、土産の交換をして、主人公は真に裕福になつた。物語の結末において精神的善が「長者」になり、悪は「長者」の座を去るか、莫大な対価を支払うことになつて、矛盾は解決されたのである。

### 3. 殿との関係

アイヌ・和人関係という観点から注目されるのは主人公と平殿、大将兄弟と大殿の関係である。大殿から難題を持ちかけられ、大殿より身分が低く、どうすることもできない平殿に対し、主人公が大殿への非難を述べ立て、それをそのまま大殿に伝えるよう、平殿を説得する場面で、「(平殿が)僕を自分の後ろ盾のように思つても」非常に心配しているようであるのが哀れだ、といった表現があり、平殿と主人公(僕)との関係において、平殿を守護するのは主人公である。平殿を交易相手に選んだことも、平殿が「誠に心根がいいのを、われは納得したから、そこに立ち寄つたのだ」と語る。<sup>(6)</sup>一方、大将兄弟と大殿との関係において、大殿の悪い企ては大殿自身の着想ではなく、影で大将兄弟が糸を引いているとされており、大殿は大将兄弟の企みに従属させられている。

以上のようなアイヌが主であり、殿が従であるような関係は、

一般的に知られているアイヌ・和人関係史の、どの時代においても見られない。このような関係が、古文書から再構成された歴史叙述に存在しないからといって口承文芸における関係図式が

いう結末によって、最終的な価値判断がなされている。

## 二、二つの類話

### 1. 萱野茂のテクスト

次に「銀の柳林 金の柳林」とよく似た筋をもつ二つの物語を分析する。<sup>(8)</sup> 使用するのは萱野茂が採録、日本語訳したテクストで、原文が付されていない。アイヌ語原文のないテクストを資料として用いることについては異論があるかもしれない。しかし本稿の目的はアイヌ語研究ではなく、アイヌ口承文芸の「真正性」を問題にするものでもない。明治以降、アイヌが日本語教育を施され、和風化させられていったという歴史過程、アイヌ社会に文字文化が浸透してゆき、「口頭伝承がかつてと同様の環境で受け継がれなくなっていく過程を考慮した場合、萱野茂の「日本語」によつて「記述」された「アイヌ口承文芸」は、その形態自体が歴史を反映しているともいえる。以上のような事情をふまえ、ここでは萱野の日本語訳テクストを「萱野茂の伝承」と位置づけて読むこととする。

### 2. 黒ギツネのイナウ

「黒ギツネのイナウ」<sup>(9)</sup>は「銀の柳林 金の柳林」と同様、孤獨な少年である主人公が和人の國へ交易に行き、和人の悪い殿様からの難題に打ち勝ち、富を手にする物語である。

し「悪アイヌの血統」「くされアイヌの子孫」となる場面がそれである。主人公は正しい精神を持ち、それゆえカムイに守護される存在である。しかし、大殿からみれば、大殿へ拝礼せず、献上品を持参することもせず、大殿を差し置いて平殿と交易をする主人公は「悪いアイヌ」なのである。ここには視点の取り方による相対性が現われているが、この物語においては主人公の勝利と

## 精神的次元

善を表現するのは主人公（私）、その父、神による選別の結果「良い人々」とされたコタンの女と子供である。主人公の交易相手である殿は「銀の柳林 金の柳林」においては精神の良さが明示されていたが、この物語における位置づけは微妙である。殿から酒やごちそうを勧められた主人公は「酔っぱらってはならないと思い、あまり飲みませんでした」と語り、殿を完全に信用してはいない様子である。<sup>(10)</sup>しかしながらこの殿は神棚にお酒をあげ「オッテナと私が、いつまでも仲よになれますように」と祈り、また交易の価値にたくさんの品物を主人公へ渡す。信仰の篤さと良き交易相手であることは先に確認した通り善なる条件である。しかし出会いの段階で主人公は殿を信じきることができていない。この物語の前提状況として、和人との交易関係が一種の緊張をはらんだものと認識されていたことが考えられる。この点において主人公と交易相手との関係は「銀の柳林 金の柳林」ほどシンプルではない。

一方、悪を表現するのは、「銀の柳林 金の柳林」と同様、主人公をだまして交易につれて行つてくれないコタンの交易者たち、精神の悪い殿様、主人公が殺されようとするのを見物に来た大勢の和人、神によって始末される精神の悪いコタンの人々である。なおコタンの交易者たちと悪い殿様が交易関係にあるか否かは物語上不明である。

アイヌの行為項における善の基準はやはりカムイへの礼拝と

所以はカムイとの関係という点では明確にされていないが、彼等が嘘、偽りを言う者であり、精神の良い主人公を陥れよう企むという点で、間接的にカムイに反した存在であることがわかる。和人の行為項に関しては先述の通り、主人公の交易相手の殿は絶対的に善なのではなくて、徐々に善であることが明らかになるのであり、非・悪から善へと物語の進展につれて移行してゆく存在である。一方、精神の悪い殿は、コタンの人たちとの関係が不明瞭であるにもかかわらず、最初から断定的に悪とされる。ただし、この悪殿が主人公を殺そうとした原因はコタシの人々の告げ口であつて悪殿単独のものではない。アイヌの善悪、殿の善悪の対応関係はからうじて良いアイヌと良い殿、悪いアイヌと悪い殿という結びつきを確保しているものの、その関係は「銀の柳林 金の柳林」に比して明確ではない。

## 物質的次元

この物語においては「銀の柳林 金の柳林」におけるほど精神的次元と物質的次元の価値の対象関係は明確ではない。和人の殿はいずれも、和人的価値において富を所有する存在であるが、アイヌの行為項においては精神の悪いコタンの人々がニシバであるとは明示されていない。主人公は身寄りがなく、生活に困らない程度の経済状態である。

## 矛盾と解決

この物語においても主人公の父は精神が良く、和人交易を行つてゐたことが、黒ギツネの神の息子から告げられる。これから主人公の時代と父の時代との断絶を察することが出来るが、断絶するに至つた経緯は明らかでない。

この物語が目指すのは前章同様、精神の良い主人公が裕福になることである。その解決は、やはり神から与えられたお守り（イナウ）が起こす魔法によつてなされる。さらにカムイによる善良な村人とそうでない人々との選別がなされ、精神の悪いコタンの人々は退治されてしまう。主人公は悪殿からのお詫びの品と大きな家を入れ、善良なコタンの女、子供とともに裕福にくらす。善、富が結合し、悪い殿は罰され、悪いアイヌは退治された。

## 私と殿の関係

私と交易相手の殿の関係は「銀の柳林」との比較で興味深いズレがある。後者においては、主人公が平殿を守護する関係にあつた。しかしながら、この物語においては、悪殿に呼び出された主人公に対し「私ができる限り守つてあげましよう」と

いうのは殿の側で、主人公と交易相手の関係は逆転している。しかししながら、実際に主人公の窮地を救うのは、殿ではなく黒ギツネの神がくれたイナウであった。イナウからオオカミが何頭も飛び出し、あたりの見物人を食い殺していく。恐れをなした悪殿は助けを乞う。この段階になつて主人公の交易相手の殿は「もしも

このオッテナにうそをついたら、いつでもやつて来てオオカミを放し、街の者をかみ殺させるから覚えておくがよい」と言い放つ。この殿は主人公が困難を乗り切る際に、有効な働きをしてはおらず、とつてつけたような存在である。事件のその後の関係も、「銀の柳林 金の柳林」では主人公と平殿はその子孫の代までも友好関係を築き、毎年交易をする関係であったが、「黒ギツネのイナウ」においては、その後の関係には触れられていない。主人公と殿との関係は薄まつていて。

このような関係の背景として、この物語においては「銀の柳林 金の柳林」に見られたような殿同士の地位の差、というものが描かれていない点が重要だろう。和人の世界の身分的多様さはこの物語にはみえない。したがつて前章におけるような悪による抑圧という共有事項を、主人公と交易相手は持つていないのである。さらに先述の通り精神的次元において、この殿の善性は今ひとつ不確かさを伴つており、この点でも主人公との重なり合いは薄いのである。この物語においてアイヌと殿との関係は「銀の柳林 金の柳林」に比して不安定であるといえよう。

## 3. 水の井戸

「水の井戸」<sup>(1)</sup>も筋は前二編とほぼ同じである。異なる点は、主人公が孤独な少年ではなく、両親をもつてゐる点、最終的に主人公は命を助かるだけで、富を手にするわけではないという点、登場する神が八幡さんという和人の神である点である。

## 精神的次元

主人公の交易相手である山の殿様は、主人公が神に祈るための酒を提供し、主人公が難題を克服して生き延びたときには涙を流して喜んでくれる存在で、「銀の柳林 金の柳林」の場合と同様、精神的次元におけるアイヌ・和人の二項対立はみられない。その一方で前二編と異なる点は、アイヌ内部の倫理的対立（良いアイヌと悪いアイヌ）が存在しないという点である。主人公に敵対的なアイヌの存在はここにはない。コタンの人は主人公が交易へ出発する場面と、コタンへ帰還した場面で登場し、前二編と同様、主人公を交易に連れて行つてはくれない。

しかしこの物語の結末で山の殿様が和人地にはもう来ないほうがよいと告げ、主人公もそれに同意するように、この物語では交易が恒常に目指される行為とは位置づけられておらず、交易に連れて行かないという行為が富の独占や意地悪といった意味に直接つながらない。コタンの人々はただ交易に行き、戻ってくる。主人公が和人地で遭遇する事件にも関与していない。彼等はむしろ背景描写に近い扱われ方をしている。悪い浜の殿様とも関わりのない存在である。この物語で問題となっているのは和人の悪、浜の殿様のみである。

## 物質的次元

主人公の初期条件は「何を欲しいとも、何を食べたいとも思わ

ないで育つた」と表現されている。これはアイヌ社会において生活の豊かさを表していて、主人公はアイヌとして豊かなことがわかる。ここで対置させられているのは和人的富とアイヌ的富といえる。ただしこの物語では、先述の通り和人的富は獲得の目的とはされていない。先の二つの物語においても、主人公は過不足なく暮らしているのだが、物語の結末においては和人由来の富をも獲得し、末永く豊かに暮らすという解決がもたらされた。しかし、この物語において主人公は、悪い殿からお詫びの品を手に入れるものの、それ以後、和人の所へ交易に行くことなく、物語の最初と同様の何不自由ない暮らしにもどるのである。

## 社会矛盾と解決

この物語においてはアイヌ世界の善悪は問題になっていない。善悪が問題とされるのは和人の殿においてである。物質的にもアイヌは過不足ない生活に満足していて、和人との交易は嘗まられるものの、それによる経済効果は物語上みえない。しかもこれが解決されるべき矛盾ととらえられているようにもみえない。物語の過程を通じて精神的次元、物質的次元の関係は変化しない。この物語が示唆するのは、アイヌにはアイヌの世界があり、和人には和人の世界がある、という明確な両世界の線引きである。つまり、この物語における解決は、先の二篇のよくな社会矛盾の弁証法的解決ではなくて、矛盾を発生させる状況、和人との関わりからの退避である。

このようなアイヌ世界と和人世界の分離志向が見られる一方、注目したいのは、この物語で主人公の削ったイナウを受け取り、彼を救うのが和人の神様（八幡さん）である点である。和人の世界で、和人の悪ゆえにアイヌが直面する危難に際し、イナウは和人の神に対しても効力を發揮するのである。

### おわりに－社会変革のためのカムイ信仰イデオロギー

三つの物語は筋をほぼ共有しながら、その行為項の関係配置は微妙なそれをみせている。三つの類話の差異は背景とする歴史状況の差を示しているのかもしれない。しかしながらこれらを内容において時間的空間的に配列しなおす作業は、困難であるばかりでなく、具体的な時と場所が物語に明示されてない以上、これらに時間を与えようとすれば、物語に外在的な既存の歴史観に沿つて配列することになるという難点がある。少なくとも物語が伝承された社会においては重視されていない特定の時間記述を問題にするよりも、物語に含まれるメッセージを、物語に外在的な歴史研究がどのように受け止めるかがむしろ問題となるだろう。

物語上の社会矛盾のあり方に着目すると、三つの物語全てにおいて矛盾はアイヌと和人という民族対立において発生しているのではなく、倫理的な善惡をめぐって発生している。交易が肯定される限り、基本的に交易相手としての和人が前提的に悪であることはありえない。しかし三つの物語からは、交易は危険を伴い、またそれをめぐっては倫理的価値の墮落が生じるもの

なのだが、というメッセージが伝わってくる。忌避されるべきはこのような事態であり、それを回避するためにカムイを礼拝し続けなければならない、と物語は語っている。物語上、重視されているのは、以上のようなメッセージであり、交易のリスクを特定の時と場所に封じ込めてことではない。

アイヌの信仰を説明する言説は一般にアイヌと自然とのかかわりを強調し、それは現在におけるステレオ・タイプ「自然と共生する民」としてのアイヌ像へ結ばれてゆくが、このようなアイヌ像は自然環境との関係をクローズアップすることによって、和人社会との関係という問題を隠蔽してしまう。しかしながら本稿で分析した三つの物語は、カムイ信仰の解決する矛盾が、必ずしも自然環境に由来する不安や問題ばかりではないことを示している。そこに存在した問題は、アイヌ社会内部および和人社会との交渉の上で生じる倫理的・経済的矛盾であつた。このような人為的な社会矛盾に対する措置として、カムイへの礼拝、イナウの力が重視されているのである。イナウはアイヌのカムイ、すなわちアイヌの力を超えた存在（動植物、火、水など自然環境を構成するもの）を制御し、味方につけるうえで重要な道具であり、その機能の本質はアイヌにとってどうすることもできない矛盾の解決であるといえる。ならば、その効力の範囲が自然に限らず社会関係に及んでも不思議ではない。さらに「氷の井戸」におけるように、イナウを介した交渉は和人の祀る神さえ巻き込むことが可能なのである。

三つの物語は、互に文脈や社会関係の配置をずらしながらも、和人関係の肯定的・否定的両側面、いかに危険を回避し、幸福な関係を得るかという課題、を語っている。和人はアイヌ社会をとりまく「環境」、すなわち制御し、利益を引き出しつつ共存すべき対象として存在する。理念型としての和人関係は「よき交易相手」というシンプルなもので、そこに到達する方法がカムイへの信仰である。セッティングをずらしつつ、複数の伝承者によって語られ続ける社会矛盾解決手段としての信仰のあり方は、状況が変わっても回帰すべき社会関係の理念型があり、そこへ回帰する方法がカムイへの信仰なのだ、という物語の個別性を超えた共通観念の存在を示している。

ところで、物語上の象徴的な矛盾解決については、被抑圧者による想像上の解決、耐え難い現実を生き延びるための空想上のユートピア、現実から逃避するためのアヘンといった、希望の持てない解釈がしばしばなされる。<sup>(12)</sup>しかしアイヌもやはり、現実には解决できない耐え難い苦痛を耐えるため、和人の悪い殿を打ち負かす痛快な物語を必要としたと考えるのは多少物事を単純化しすぎだろう。それならばあえて善良な和人の殿という存在を設定する必要はない。和人の理不尽さに対する用心と交易の肯定の双方を同時に成立させねばならない、というのがこの物語を生んだ社会の要求であつたろう。そしてこの場合の交易はアイヌの行為項が進んで行つてみたい営みとしてあるのであり、歴史学的言説で言われる不正交易、搾取的交易といつ

た問題は交易に本質的に付随する性質としては登場しない。物語が取り組もうとしている苦痛は、和人がアイヌとの関係において想定している右のような問題とはずれていて、むしろ和人との関係や交易によって生じるアイヌ社会の堕落の方にある。もつとも物語による象徴的解決が夢想か否か、という問は、物語のイデオロギー性を検討する際には適切ではない。この場合問われるべきは、物語による解決が現実生成機能を果たしえたかどうか、イデオロギーの機能を貫徹したかどうかである。イデオロギーは、本稿の冒頭で述べたように、現実世界のありのままの反映ではなく、世界がそのようにある（べきだ）という信念の社会的共有である。イデオロギーの本質はそれが現実か否かではなく、そのような想像が内面化され社会的に共有されることによつて現実を作り上げる機能にある。

本稿において抽出できた対和人関係認識に従えば、從来、歴史学研究によつて構築されてきたアイヌ－和人関係図式が両者関係において考へ得る唯一の図式ではないといえる。カムイとの関係において測られる善惡を基準とした対和人関係のアイヌ的解釈は、和人が欲望するような和人－アイヌという二項対立的世界觀とは異質である。もつともアイヌの物語上、アイヌと和人の区別は厳格である。しかしその概念はそれを軸に善と惡、文明と未開、強者と弱者といった対立概念が振り分けられるような基準として機能することはない。そのような単純化を避けることによつて、アイヌの物語世界において和人との関係は無

条件に好ましかつたり、好ましくなかつたりするようなものとはならないのである。仮にこのような信念の下にアイヌが和人との現実の関係を取り結んでいたとすれば、歴史学的に構築された諸々の言説はどのように評価し直され得るのか、再記述し得るのか、今後取り組んで行きたい課題である。

### 注

- (1) 主なものに知里真志保（一九五三・四）、海保嶺夫（一九七四）、榎森進（一九八一）、佐々木利和（一九八一）、中川裕（一九八九）、奥田統己（二〇〇一）、志賀雪湖（二〇〇三）など。
- (2) 但し、厳密には、リクール（一九八五）の言うように歴史とフィクション物語の関係は実在対非実在という対抗関係の問題ではなく、両者の相互参照的関係にある。
- (3) 金成アシリロ一九三三（昭和七）年四月二五日口述、金成マツ（一八七五～一九六一）筆録、蓮池悦子訳註（『トウイタク（昔語り）』三一 二〇〇〇 北海道教育委員会）。蓮池悦子の解題によると、金成アシリロはマツの義弟（知里高吉、知里幸恵・真志保の父）の従姉にあたる人物で生没年は不詳である（蓮池悦子二〇〇〇）。
- (4) 主人公に関して wenkur という言葉が使われるのは物語の後半になつてからだが、その文脈では大将兄弟が主人公をだましいじめていたのは彼がただの wenkur hekai
- (5) この場合の「歴史」とは歴史学が構築した歴史ではなく、物語内で想定されている過去のこと。
- (6) このような関係は、カムイとアイヌの関係に重なり合う。カムイとアイヌの狩猟における関係性は、カムイがアイヌの矢を受け取り、客として訪れるのだと考えられる（知里幸恵一九三三、二二頁）、（知里真志保一九五三・四、一～一四頁）。
- (7) 物語が実在的な現実に作用するのは最終的には読者を通してであると考える。cf. ヤウス（一九七〇）、リクール（一九八五）。同様に現実社会との想像的な関係の表象であるイデオロギーが実現されるのも、それを想像する人々によるイデオロギーの内面化を通してである。
- (8) 口承文芸における類話は、独立した物語として扱われないことが多いが、本稿においては、類話上のモチーフや文脈の差異を無視することはせず、それらのズレが生じている以上、基本的には互に別個の物語として扱う。
- (9) 貝沢とうるしの「黒ギツネのイナウ」一九六五年口述（萱野茂『カムイユカラと昔話』一九八八 小学館）。
- (10) 歴史上の対和人戦争でアイヌの大将が和人の偽りの和睦に応じ、酒宴の席で酔つたところを殺害されるというパターン化された言説が松前藩の年代記などに残されてお

り、現在の歴史学においても実在的過去として認識されている。このような言説が和人由来のものか、アイヌにも共有されたものかを判断できないものの、和人の前で酒に酔わないという自制心の由来は、上述の歴史的言説と無関係ではないだろう。

(11) 木村よそ「氷の井戸」一九六一年口述（萱野茂『カムイエカラと昔話』一九八八 小学館）。この物語は三分の一ほどが日本語で語られたものだといわれる。

(12) レヴィ・ストロース（一九五五、三三八～九頁）はカドウヴェオ族の女性の顔面彩画のデザインを階級社会の矛盾の想像上の解決と解釈し、ダーントン（一九八四、一五二～三頁）は一八世紀前半フランスの印刷工による猫の虐殺事件を、解雇という身の危険を冒さずに、ブルジョアである親方夫妻を愚弄する行為と解釈している。以上のような解釈は、被抑圧者による象徴行為を結局現実には何も解決することのない單なる夢想の位置に閉じ込めてしまい、彼等を希望を奪われた存在にしてしまう。

#### 参考文献

- アルチュセール、ルイ 「イデオロギーと国家のイデオロギー 諸装置」一九七〇（『再生産について』一〇〇五 平凡社）  
榎森進 「北海道近世史の研究」一九八一 北海道出版企画センター  
奥田統己 「歴史研究の資料としてのアイヌ口頭文芸」『北海道

立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』一九九六

——「語り継がれる歴史と時間—アイヌの歴史認識を手がかりとして」二〇〇一（赤坂憲雄、中村生雄、原田信男、三浦佑之編『いくつもの日本』II 岩波書店）

海保領輔『日本北方史の論理』一九七四 雄山閣出版  
佐々木利和「酋長サカナの物語—あるアイヌ研究の側面」『歴史研究』一五四 一九八二 新人物往来社

志賀雪湖「アイヌ口承文芸における『歴史』」「歴史評論」六三九 二〇〇三  
ダーントン、ロバート『猫の大虐殺』一九九〇（一九九四 岩波書店）  
知里真志保「ユーカラの人々とその生活」一九五三・四（『知里真志保著作集』三 一九七三 平凡社）

知里幸恵『アイヌ神謡集』一九二三（一九七八 岩波文庫）  
中川裕 「口承文芸に見えるアイヌと和人の関係」一九八九（北方言語・文化研究会編『民族接觸—北の視点から』六興出版）

プロップ、ウラジミール『口承文芸と現実』一九七六  
(一九七八 三弥井書店)  
ヤウス、ハンス・ロベルト『挑発としての文学史』一九七〇  
(一九〇一 岩波書店)

リクール、ポール『時間と物語』III一九八五（一九九〇 新曜社）  
レヴィ・ストロース、クロード『悲しき熱帯』I 一九五五  
(一九〇一 中央公論社)

(さかた・みなこ／東京大学大学院)